

デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究（2）

－フレデリック 4 世治世（1699-1730 年）を中心に－（下）

佐保吉一

Fundamental Study on the Danish Absolute Monarchy in the Period of Intermediate Term (2)

-Focused on Frederik IV's Social Policies (Latter Part)-

SAHO Yoshikazu

Abstract

The aim of this paper is to examine the social policies of the Danish King Fredrik IV (king: 1699-1730) during the time after the Great Northern War (Store Nordiske Krig) by looking at Ludvig Holberg's eulogy speech for Frederik IV.

The absolute monarchy was officially and peacefully introduced into Denmark in January 1661, by the King Frederik III (king:1648-1670). Since then a series of measures were taken to secure this new system and the Danish absolute monarchy was consolidated basically during the reign of Christian V (king: 1670-1699).

And his son, Frederik IV was a very complex person. He committed bigamy twice. But as sovereign, head of a state, he had a strong self-conscious, will and sense of being an absolute king and had a great capacity for work and established his own decision making absolute monarchy, called king-centered "personal absolute monarchy".

Social policies he realized between 1709 and 1730 were as follows:

- 1) established over 240 elementary schools (rytterskoler) in the rural areas
- 2) introduced audience system (audiens hos kongen)
- 3) influenced by Pietism and issued a decree with rules for the Sabbath

After the Great Northern War, Denmark obtained English and French guarantees for the sole possession of the Duchy of Schleswig by the Danish crown. This brought Denmark peace and stability. Thereby Danish absolute monarchy was ready to move onto the next stage; "bureaucratic absolute monarchy".

本稿は『東海大学文化社会学部紀要』第5号(2021年2月)に掲載された拙稿「デンマーク絶対王制中期の社会政策に関する基礎研究(1)ーフレデリック4世治世(1699-1730年)を中心にー(上)」の続編である。今回社会政策については、主に大北方戦争以降を扱い、その際にはデンマーク国王フレデリック4世と同時代を生きたルードヴィ・ホルベア Ludvig Holberg(1679-1765)¹⁾がフレデリック4世に対して行なった追悼演説²⁾を適宜同時代史料として用い、社会政策の内容や意義そして絶対王制の特徴を考察する。

4. フレデリック4世の治世(1709-1730)

4-1 大北方戦争への再参戦と結果(1709-1720年)

デンマークの宿敵スウェーデンは16世紀後半以来周辺各国と戦争を行ない、17世紀半ばには最大版図を実現した。支配領域はバルト海対岸のドイツ北部にまで及び「バルト海帝国」と呼ばれ、スウェーデンはヨーロッパの大国の一つであった。大北方戦争はこのようなスウェーデンの強大化に対して、そのことを好ましく思わない周辺諸国、具体的にはデンマーク、ロシア、ポーランド＝ザクセンといった国々が同盟を締結した上で、順次スウェーデン国王カール12世を相手に戦った戦争であった。

そのなかでデンマークにとっての大北方戦争は、スコーネ地方を中心とするスウェーデン南部の失地回復、そしてゴットープ家とスウェーデンの関係を断ち切ることを目標に1700年3月にデンマーク側が開始した。具体的には、スウェーデンと良好な関係にあるホルシュタインのゴットープ家のスレースヴィにおける領土にデンマークが攻撃を仕掛けたのであった。これを受けてスウェーデン国王カール12世(在位:1697-1718)がデンマークの首都があるシェラン島を急襲したことにより、デンマーク側が講和を請う形で休戦条約が結ばれ、戦争は一端終わった。その後カール12世は東方戦線に転じ、ポーランド軍を撃退し、そしてナルヴァの戦いでは数でまさるロシア軍に勝利した。さらにポーランドとその同君連合国であるザクセンをも撃破し、1706年頃には、反スウェーデン連合の国で敵対する国はほぼなくなった。しかし敗戦を機に近代化を急速に推し進めたロシアが短期間に力を付けたため、カール12世はロシアを制圧すべくモスクワを目指して遠征を行なった。

そして1709年にウクライナを戦場に行なわれたポルタヴァの戦いでは、スウェーデン国王カール12世がピョートル率いるロシア軍に敗れた後、命からがら遠くトルコに敗走し、スルタンの賓客となった。このような宿敵スウェーデンの動きを受けて、一端はスウェーデンに停戦を請うたデンマークは、失地回復の好機到来とばかりに、スウェーデンに対して再度戦争を開始する準備を行なう。ベニスに滞在中であったフレデリック4世は急遽帰国することになり、帰路ポーランドのアウグスト2世と参戦についての打ち合わせを行なっている。顧問会議に反対者はいたが、1709年10月28日、宣戦布告書の送付を以てフレデリック4世は戦争を開始した。このときのデンマークのモットーは「今しかない Nu eller aldrig」で、スウェーデンに上陸した資材運搬車にはそのようなスローガンが記されていた³⁾。

さて、デンマークからスウェーデンへ侵攻するに際して、通常次の3種類の戦術が用いられてきた。

- ①デンマークの同君連合国であるノルウェーが、国境を越えてスウェーデン側を攻撃する
- ②エアースン海峡を越えてスウェーデン南部に位置するスコネ地方へ侵攻する
- ③ユトランド半島南部に位置する親スウェーデンのホルシュタイン・ゴットープ家の領土や北ドイツにあるスウェーデン領を攻撃する

今回デンマークは、スコネ戦争（1675-79年）時と同様に上記の①、②の策をとった。

まず1709年11月、約15000人の兵隊がスコネの漁村に上陸した。デンマーク軍の司令官はクリスチャン・レーベントロウ Christian Reventlow である。一方スウェーデン軍の司令官は連戦錬磨のマグヌス・スティンボック Magnus Stenbock であった。当初はデンマーク軍が優勢で、失ったスウェーデン南部の再獲得が成功するかに見えたが、年が明けて状況が変化する。デンマーク側の司令官がランツァウ Jørgen Rantzau に交代してから劣勢が続いた。その中で迎えたのがヘルシンボアの戦い Slaget ved Helsingborg であった。1710年3月10日に行なわれた戦いにはフレデリック4世も参加したが、デンマーク側が決定的な敗北を喫することになった。デンマーク軍はスコネから去りシェラン島に退却した。これ以降デンマークがスコネ地方を再獲得することは二度となかった。

その後デンマークは作戦を変更し、上記③に基づいて1712年春に、当時スウェーデン領であった北ドイツのブレーメン・ヴェルデン Bremen=Verden 地方への侵攻を計画する。その際問題になるのがスターデ Stade という要塞都市であった。そこでデンマーク軍は8月29日に同市に猛攻をかけ、スターデは町全体が炎に包まれた。1週間後スウェーデン軍は降伏し、それ以降スターデは1715年までデンマークが支配することになった⁴。

デンマーク軍はこの勝利の後、西方に向かって公爵領の方向に退却したが、それに対してスウェーデン軍の司令官スティンボックは1712年12月に戦いを挑んだ。これが史上ガーデブッシュ Gadebusch の戦いと呼ばれるもので、スウェーデン軍が勝利をおさめた。しかし後のことを考えると、この勝利は割に合わないものとなる。スティンボックはデンマーク軍が劣勢になり、ロシアやザクセンもはや援助しなくなるだろうと考えたが、それは大きな誤りであった。フレデリック4世の外交的努力の結果、ロシア・ザクセン軍の一部がスウェーデン軍の後を追っていたのである。ホルシュタイン公爵領に到着したスティンボックはゴットープの主要要塞であるテュニング Tønning に陣取るが、結果的に翌1713年5月には要塞が包囲され、最終的にはデンマーク側の捕虜となったのである（1717年に死去）。

後の歴史を振り返るとこのスウェーデン側のテュニングにおける敗戦は、ポルタヴァでの敗北と同様、大北方戦争の転換点であった。ポルタヴァでの敗戦がスウェーデンにとって、東欧での軍事的影響力が低下したことを示す一方で、このテュニング包囲戦での敗北はスウェーデンの（北）ドイツにおける軍事的役割が実質的には終了したことを示しているのである⁵。そしてデンマークにとってこのテュニングでの勝利は、ヘンシンボアやガーデブッシュでの敗戦の埋め合わせをした上、さらに頭痛の種であったゴットープ家がスウェーデンからの援助を今後獲得できなくなったことを意味していた。南部国境における不安が一扫され、安全保障上も落ち着いた状態になったのであり、先王のクリスチャン5世が成し遂げられなかったことをフレ

デリック 4 世が実現したのである。

なおこの当時の西欧列強であるが、スペイン継承戦争で手一杯であり、ようやく 1713 年のユトレヒト条約締結後、関心と利害をもって北欧地域における和平の構築、ひいてはロシアの一方的な進出を抑えようとするのである。

その西欧列強の一国である英国は、1714 年にハノーヴァー公を新国王に迎え、英国＝ハノーヴァー連合王国が成立した。翌年、デンマークはその英国＝ハノーヴァーと条約を締結し、デンマーク領のプレーメン・ヴェルデンを割譲する代わりに、ゴットorp 家領も含む全スレースヴィにおけるフレデリック 4 世の主権が認められた。その直後にはプロシアと同様の条約を締結し、着々とスレースヴィにおけるデンマークの主権を固めていった。

一方スウェーデンでは、カール 12 世が 7 年ぶりにトルコから北ドイツのスウェーデン領であるストラールズンドに帰還してきた。1715 年 12 月には、そのストラールズンドが反スウェーデン勢力側によって包囲され、スウェーデンの北ドイツ、換言するとヨーロッパ大陸における軍事的活動はこの時点で終焉することになった⁶。グスタヴ・ヴァーサ以来の宿願であった「バルト海をスウェーデンの内海にする」という外交目標は道半ばで潰えたのである。

この後スウェーデンは 1716 年以降、ノルウェーに照準を合わせて攻撃を仕掛けてくる。デンマークとスウェーデンの戦争の舞台（主戦場）がスカンジナビア半島のノルウェーに移ったのである。一方ロシアの動きは戦略的で、同盟国のデンマークに対しては、共同出兵でスコネに再上陸する作戦をもちかけている。それに基づいてシェラン島に約 3 万のロシア兵が待機し、ピョートル 1 世自身も 1716 年夏に首都コペンハーゲンを訪問している。しかし、10 月末にはその共同出兵案が流れてしまい、兵も引き上げていった。

一方で、ロシアはスウェーデンとも協議を行なっていた。ロシア側の望みはポーランドの 아우グスト 2 世の王位剥奪と領土獲得であった。さらに彼はスウェーデンのノルウェー侵攻を容認する見返りとして、バルト海沿岸のスウェーデン領の獲得とロシアに近いフィンランドのヴィーボルグ Viborg 及びケックスホルム Kexholm レーンをロシアに譲渡することを要求していた。カール 12 世はこのロシア案を受け入れなかった。スウェーデンの領土を譲渡する気は一切無く、ノルウェー攻撃にしても援助無く独力で可能だと思っていた。このロシアの提案があったことは、反スウェーデン側が実は一枚岩ではなく結束が無力化していることを示していた。

さて、スウェーデン軍のノルウェー進軍であるが、当初は首都クリスチヤニアを占領したこともあったが、デンマーク側の反撃で主戦場は南部のフレデリックススティーン Frederikssten 要塞のあるフレデリクスハルドであった。この要塞を巡っての攻防戦となったが、視察中のカール 12 世が 1718 年 12 月 11 日に凶弾によって命を落とした。指揮官を失ったスウェーデン軍は、急遽撤退し、同時に北部のニダロス戦線からも退却した。

これをもって実質的には大北方戦争の戦闘は終了し、事態は休戦の方に向かって動いていくことになる。スウェーデン国内ではカール 12 世の妹のウルリーカ・エレオノーラと彼女の配偶者であるヘッセン公フレドリックが順に王位を継ぐことになり、いわゆる「自由の時代 frihetstiden」を迎える。フレドリック達は英国＝ハノーヴァーと手を結び、その一方で、ゴットorp 家は新たにロシアと結んだ。そうしたなかスウェーデンは 1719 年 11 月には、英国＝ハ

ノーヴァーと早々に講和を結び、1720年2月にはプロシアと講和条約を締結した。

デンマークとスウェーデンの講和は英国とフランスが仲介し、主にストックホルムで交渉が行なわれた。最終的にはデンマークのフレデリクスボー城で条約が締結された⁷（フレデリクスボー講和条約：1720年7月3日）。その主な内容は以下のとおりである。

- ①デンマークがスレースヴィにおけるゴットープ家領を獲得する（英仏の保証あり）。
- ②スウェーデンとの間にあるエアスン海峡の通行税をデンマークが徴集できる。
- ③戦時補償金 60 万リースダーラをスウェーデンがデンマークに支払う（デンマークが戦時中に占領したリュージェン Rügen 島、北ドイツのフォアポメルンの一部、ヴィスマル、マーシュトランド Marstrand を放棄するという条件で）

さて、この戦争の終結を機にデンマークでは新しい城の建設が行われた。元来フレデリック 4 世は趣味のために計画していた建物が、結果的にはフランス・バロック様式の宮殿となった。当時流行のシンメトリックスタイルであり、デンマークのベルサイユとも言われる。付属庭園も有名で、後にフレデリック 4 世夫妻も好んで滞在した。平和をもたらすことになる講和条約の締結を記念して、この城は「平和の城 Fredensborg」と名付けられた⁸。

つぎにこの講和条約の内容を考えてみたい。総合的にみて大北方戦争の結果はデンマークにとって好ましいものであったといえる⁹。まずデンマークにとっては、積年の課題であったスウェーデンとゴットープ家の関係を絶つことが出来た。これによって南部国境が安定し、南方に対する憂いが減じられた。次に、スウェーデンに海峡通行税を課税することが可能となったことで、デンマーク側は財政的な利益を得ることができた。

長年にわたる宿敵スウェーデンは大北方戦争の結果、バルト海での覇権を失い、代わって覇者となったロシアの前ではデンマーク＝ノルウェーと同程度の国となってしまった。デンマークにとってはもはやライバルとして気にかける必要がなくなったのである。大国の意向で初期に絶対王たちの課題であった失地回復こそ実現出来なかったが、今後そのためにエネルギーを注いだり、戦争をする必要は無くなった。ただ大北方戦争は後半で、それまでオーストリア継承戦争で余裕がなかった英国などの大国が干渉するようになり、西欧列強の意向が北欧の国際関係にも大きく影響するようになった。アメリカ独立戦争やナポレオン戦争が行なわれた 18 世紀後半になるとそれが顕著になる。その時期までデンマークは一時的な経済的危機を迎えはするが、しばらく戦争のない「平和な」商業繁栄時代を迎えるのである。

4-2 戦後復興と社会（1720-1730 年）

フレデリック 4 世の治世後半（1720-30）はそれ以前の戦争期（1700-1720）と比較すると、内政面でも外交面¹⁰でも比較的穏やかな時代であった。歳入の 8 割を消費した戦争がようやく終わり、国民のための社会政策も積極的に実施されることになる。ただ経済の基盤である農業にとっては厳しい状況が続いたため、政府は重商主義政策のもと、貿易とマニファクチャー

に活路を見いだそうと努力した。

戦争が終結してすぐに国王フレデリック 4 世が取りかかったことが 2 つある。1 つは私的なことで、愛するアンナ・ソフィエ Anna Sofie Reventlow を正妻にすることであり、もう 1 つは公的なことで公爵領のスレースヴィ全体をデンマーク国王の下へ編入することであった。

まず公的なことであるが、1721 年 8 月 22 日の国王特許状 patent により、スレースヴィに存在するゴットープ家領は正式にデンマーク王国領土に編入された。それをうけて 9 月には公爵領スレースヴィにあるゴットープ城で、フレデリック 4 世に対する騎士と高位聖職者の忠誠宣誓式が執り行われた。これによってデンマークは南部国境での憂いを減ずることができ、19 世紀までその地域での平和が維持されることになったのである。

次に私的なアンナ・ソフィエのことであるが、まず彼女自身のことを述べておきたい。彼女は元デンマーク官房の長官 storkansler コンラッド・レーヴェントロウ Konrad Reventlow の娘で、国王より 27 歳年下である。1711 年に国王が黒死病の蔓延を受けてコペンハーゲンからユトランド半島中部にある地方都市コリン Kolding に疎開中、開催された仮面舞踏会で出会った。国王との交際に母親は反対であったが、アンナ・ソフィエを見そめた国王は翌 1712 年、当時 18 歳の彼女を拉致する形でコペンハーゲンに連れて行き、秘密裏に結婚した。いわゆる重婚であり、しかも 2 度目である¹¹。この時点で彼女はスレースヴィの女性公爵 fyrstinde af Slesvig という称号を得ている。

そうしたなか正妻の王妃ルイセが 1721 年 3 月 15 日に死去した。そしてルイセを埋葬したまさに翌日 4 月 3 日、フレデリック 4 世はアンナ・ソフィエを早くも正妻とし、5 月末にはフレデリクスボー城にて王妃として自らが戴冠した。この正式な結婚を機に家族が分裂することになり、特に王太子クリスチャン夫妻、クリスチャンの妹のソフィア・ヘズヴィ Sophia Hedwig が国王夫妻と距離を置くようになる。

さらに今度はアンナ・ソフィエの縁者が政治的要職を得るようになり、中央政治や宮廷の中で影響力を持ち始める。例えばドイツ官房のヴィベ Ditlev Vibe はノルウェーの総督 statholdere に左遷され、デンマーク官房のセーステツ oversekretær Christian Sehested はオーデセの知事に転出し、代わりにレンテ Christian Lente が同職についた。これで枢密院や王宮の要職にデンマーク人がいなくなった。いるのは王妃の縁者でホルシュタイン出身者や外国人である。そして登場するのが王妃の異母姉妹と結婚しているホルステイン Ulrik Adolf Holstein¹²である。彼は枢密院にも席を占め、しばらく空席が続いていたデンマーク官房長官 storkansler 職に就き、ハーゲン Frederik von Hagen とロスゴー Frederik Rostgaard がデンマーク官房における日常業務を率いた。後者は旧デンマーク貴族の出自であるが、王妃の異母姉妹と婚姻関係にあった。

こうして 1721-22 年の正月には新しい人事が固まり、国王夫妻の個人的な同情を獲得した者たち（大概がドイツ系官僚）が、内政を仕切ることになった。なお国王が枢密院以外で、重要事項を相談したのは戦争大臣のガーブル Christian Gable であった。彼は軍事以外にも財政、経済、外交についても国王の良き助言者であった¹³。

4-2-1 政治的遺訓 *politisk testament*

政治的遺訓を次代に残すことは西欧では珍しいことではなく、神聖ローマ帝国のプロテスタント諸国やスウェーデンでも行われてきた。近代国家として発展する中でそのような慣行が登場したのである。デンマークの絶対王制期ではクリスチャン 5 世（1683¹⁴、1684、1698¹⁵年）とフレデリック 4 世（1723 年¹⁶）のものがある。基本的には自分の継承者に対する政治的案内であり、守るべきものであった。

それではフレデリック 4 世の政治的遺訓（1723 年 4 月 23 日）をみてみたい。形式的には息子が即位後に従うような政府規則の形をとっている。主眼は旧貴族¹⁷（ホルシュタイン出身貴族を含む）を政治的影響力から排除することにおかれている。具体的には旧貴族を政治的、軍事的に影響力の強い官職から遠ざけることである。特に国防の重要性を鑑み、よほど傑出した軍人でなければ旧貴族は軍事的な重要官職には就つけないのである。

最新の研究ではこの遺訓がすでに 1719 年 7 月－1721 年 4 月に書かれていたこと、そして文書への署名のみが 1723 年 4 月に実施されたことが明らかになっている¹⁸。その 1719－21 年の政治状況を探ってみると、隣国スウェーデンの政治状況に大きな変化があった。カール 12 世の死後、王位継承を巡って王権が制限されることになり、絶対王制の終焉を招いたのである。スウェーデン史でいう「自由の時代 *Frihetstiden*」の到来である。この状況をみて絶対王制自体が脆い政治体制であることが露呈し、その弱点をフレデリック 4 世が自覚したといえる。デンマークでも類似の状況が発生することを避けようとして、遺訓という形式で次代に戒めを伝えようとしたのであろう¹⁹。さらに、署名直前の 1723 年 3 月に大逆罪の罪で処刑されたユール Poul Juel²⁰の事件も影響している可能性も考えられる。自分の国王としての権力・権威に反抗する者に対しては厳しい態度で臨み、絶対王制を守ろうという強い姿勢が浮かび上がるのである。

この政治的遺訓は個人から個人に伝えるもので、個人的なものであるがゆえその時代の絶対王制は国王主導の個人的な絶対王制であったといえる。それを存続させるための遺訓だったのである。政治的遺訓はフレデリック 4 世のものが最後であった。それは次のクリスチャン 6 世時代は次代にわざわざ政治的遺訓を残す必要が無いこと、言い換えると旧デンマーク貴族の脅威が去ったことを意味している。いずれにせよ、このことはクリスチャン 6 世時代には絶対王制が名実ともに盤石になったことを示している。そしてそれは同時にデンマークの絶対王制が国王主導のものから新たな段階に入ることをも予告しているのである。

4-2-2 教育政策 騎士学校の設置

教育に関してはデンマーク法（1683）のなかで、両親と牧師が子ども達にキリスト教の知識を育むことへの期待が述べられただけで、それ以上具体的なことは特に示されていなかった。また、1708 年の救貧法では宗教教育を主眼とした学校の設置が義務づけられ、貧者の教育については教会書記 *degn* があたることが規定されていた。しかし学校設置は大北方戦争のため頓挫していた。当時の初等教育のための学校は宗教との関係が密接であり、フレデリック 4 世はその他の王室メンバーと同様、徐々に当時広がっていた敬虔主義 *pietisme*²¹の影響を受けてい

た。この敬虔主義は初期に例えば学校創設というような目に見え、かつ大きな社会的活動に関心を向けさせた。

戦争終結後、国王フレデリック 4 世は、懸案であった王領の騎士領の再編も考慮に入れ²²、俄に学校設置事業に取り組んだ。この学校設立に関しては、国王のフレデリックスボー城付き牧師 ヘアスレブ Peder Hersleb が大きな影響を与えている²³。加えて設立のための委員会が設置されたり、監督ヴォーム Worm が国王の意を受けて積極的に立ち回った²⁴。

そして 1721 年 3 月 28 日、国王の指示書が公布され、通常は騎士学校 rytterskolen と呼ばれる王立学校が導入されることになった²⁵。またこれはこの年に 50 歳の誕生日を迎える国王から国民への贈り物 folkegave でもあった。この法律の公布後、1721/22-27 年の約 5 年間に 240 校が王領騎兵隊駐屯地に設置された。それではここで 1721 年 3 月 28 日の校長に対する指示書をもとに明らかになった騎士学校の内容は以下の通りである。

- ①教育を受ける対象者は農村に居住する全ての少年・少女で、具体的には小作人・小屋住み農民・最下層民の子どもだけでなく、奉公人の子供も含まれている（第 1 条）。
- ②5 歳以上の児童が教育を受けることが出来、児童を学校に行かせない親には罰則がある（第 3 条）。
- ③教育は 14 歳まで継続され、授業時間は夏期には 1 日 8 時間、冬は 6 時間である。ただし、8 歳以上の児童は親の仕事を手伝うため授業時間を半分にすることも認められる。また 8 歳以上の児童は午前中、学校で授業を受け、午後は自宅に留まってもよい（第 6、7 条）。
- ④男女は別れて着席し、キリスト教知識（カテキスムス）及び読みを習うことは無料であるが、書き方や算数については有料である（第 9、10、11 条）。
- ⑤一日の流れは、まず朝は歌、祈り、聖書講読で始まり、午後は賛美歌、夕べの祈り、聖書の講読で始まり、最後は夕べの賛美歌を歌って終わる（第 13 条）。
- ⑥監督は 3 年に一度、教会委員は毎年、学校を視察してカテキスムスに関する試問を行ない、教育効果がみられない場合は校長が職を失うことがある（第 16、17 条）。
- ⑦教師の年俸は 24 リースダーラで、現物支給もあった。また牛 2 頭、羊 6 頭を飼養するための草地使用権も与えられた。給与は一部が国教会から、残りが徴募区から支払われた（第 22 条）

実際の授業や運営がどうであったかは別にすると、様々な調整の後授業内容や校長の給料まで詳細に規定されていたことが分かる。児童を学校に行かせない親への罰則や、校長が不適格な場合は交代するなど、より国が初等教育を重要視していることが伺える。

校舎は瓦屋根を有したレンガ造りの強固な建築物で、19 世紀に至るまで農村における学校の建築モデルでもあった。学校には教師の住居も付随し²⁶、校舎建設は国費で賄われた。

なお、1735 年頃農村には、騎士領学校が 271 校、他のイチシアチブで建てられた学校が 377 校あった。これは当時、読みを習いたいと思った児童の約半数の希望を満たすものであった²⁷。

1721 年に設置された騎士学校は、農民の子女に基本的な知識（宗教的知識、読み書き、算数）

をもたらす最初の組織的な試みであった。これとは対照的にコペンハーゲンやその他の都市における学校において変化はなかった。特に都市部における裕福でない児童の教育は結局 1814 年に始まる一般義務教育までなおざりにされたのであった。このように基本的には都市部も含めた全国一律の学校教育は 1814 年から始まるが、デンマークでは実は農村部における教育が先行していた。その一つの形がこの騎士学校なのである。

デンマークでは 1814 年というヨーロッパでも早い時期に義務教育制度が整備され、その土台となったのが 18 世紀に導入された一連の学校制度で、特にこの騎士学校が果たした役割は大きかった。ロスキレ大聖堂に安置されているフレデリック 4 世の石棺（大理石）のレリーフにもこの学校らしきもの、そして学校の前で本を広げる児童の姿が彫られている。これは学校設置が国王の功績として同時代にも認められていたことを示している。またこの学校の主目的はキリスト教の教育であったが、それは同時に子ども達に絶対主義下の国王と祖国に対して仕える積極的な考えを持つことを植え付けるものでもあった。

ホルベアは追悼演説において、騎士学校の設立に関しては簡単に「自分自身の費用で貧しい青少年のために 240 もの学校を設立する土台を築いた²⁸」と述べただけで、特に国王に対する賛辞はなかった。

2021 年でこの騎士学校が創設されてから 300 年経ったが、現在でも約 135 校が様々な形で残されている。

4-2-3 国王謁見制

デンマークではデンマーク法の規定により、地方当局に請願することが可能であった。また時と場合によっては直接国王に面会できる機会もあった。具体的にはクリスチャン 4 世やクリスチャン 5 世時代に、馬の準備をする待ち時間に、人々から話を聞いたのである。そのような国王が直接国民の声を聞く謁見制が 1725 年、国王布告によって制度化された（*Kundgørelse af 24. Febr. 1725*）²⁹。それによれば、毎週水曜日の午前 10-11 時に国民は自身の請願を持って、コペンハーゲン市内の王宮あるいはフレーデンスボー城に行き、謁見の間で直接国王に会うことが出来、そして国王の目前でその部屋に備えられている特注の箱に請願を入れたのである。その後国王は自らその箱を開け、投函された請願書を執務室にて目を通した。そして必要に応じて各省庁へ回して指示を行なったのである³⁰。

この制度は大成功で、下は物乞いから上は伯爵まで、臣民が次から次へとやって来た³¹。国王は大いなる関心を持って請願者の話を聞き、彼らの請願書を受け取った。国王が国民の請願を聞いてくれる本制度は、ある意味でパーソナルな国王主導型絶対主義の到達点を示しているともいえよう。

また行政機関を通さず、直接国民の意見を聞くことが出来る国王謁見制は、行政機関に対する国王の不信を間接的に示し、自らが絶対王制下、国父的存在かつ行政の長でもあることを示していた。

ホルベアはこの国王謁見制に関しては、追悼演説で次のような最大級の賛辞を送っている。

「私が驚くのは国王の臣民の苦情を聞く我慢強い姿勢である。そして国王が来場者全ての請願に目を通してのことである」。さらに次のようにも述べている。「最も驚くべき出来事は、この多忙を極める国王が、あたかも時間があるように、全ての者にご自分に会いに来る機会を設けたことである。苦情がある者に対してはいつもドアが開かれていたのである。あなた方はなんて幸せな国民なのだろうか！ I Lykkelige undersaatter!」。

国王謁見制は上にみたように間に人（官僚）を介さず、直接国民の生の声を聞ける機会であった。そしてこの制度は国民、特にコペンハーゲン市民からの信頼を勝ち得ることに一役買った。このような国民から意見を聞く絶対王制は言論が左右する絶対王制 *opinion styret enevælde* と呼ばれている。なお国王謁見制は 21 世紀の現在までデンマーク独特のものとして継続されている³²。

4-2-4 宗教政策

敬虔主義 Pietisme

敬虔主義とは大局的にはプロテスタント内の信仰復興運動、すなわち信仰上の覚醒運動であり、17 世紀末にドイツの都市ハレで始まった。ルーテル教会の正統主義・形式主義に対するリアクションとして始まり、敬虔さに価値を置き、内面的・個人的な神への信仰を基とした人生を求めた。その後ドイツ全体に広がり、後にはモラヴィア兄弟団³³を生むことになった。

この動きはドイツと地続きのデンマークにも、宗教改革同様早い段階で入ってきた。フレデリック 4 世の統治時期がまさにこの敬虔主義が流行する時期に相当している。王室でこの新しい考えに惹かれたのは不遇の王妃ルイセであった。その影響で王太子クリスチャンとその配偶者ソフィエ・マグダレーネもこの敬虔主義に大いなる関心を寄せた。個人の内面を尊び、聖書を抛り所にする教えは、伝道や慈善事業という社会実践に結びつき、孤児院や学校が争うように設立された。

フェルベック Ole Feldbæk によれば、デンマークではこの敬虔主義が末端まで受け入れられたわけでは決してなかった。コペンハーゲン大学神学部では敬虔主義が入り込まず、牧師養成教育に影響を与えたわけでもない。地域的にもそれは首都とフン島、南ユトランドに限定されていたのであった³⁴。

グリーンランド伝道

デンマークでは上にみた敬虔主義の広まりを背景に、ルーテル教会側もキリスト教の海外布教にも乗り出した。1714 年に国王フレデリック 4 世の意向で伝道省 *Missionskollegium* が設置された。その目的はキリスト教の福音を非キリスト教徒に拡大することであり、国教会に覚醒をもたらすことであった。従来宗教的なことはデンマーク官房の職務領域であったがそれが分離されて、専門の省が設置されたのである。国王はより大きな関心を宗教政策に注ごうとした、すなわち宗教政策を強化しようとしたのである。最初の責任者 *formand* は敬虔主義者の J.

ホルステイン J.G.Holstein であり、事務局長はヴェント Chr. Wendt で彼も敬虔主義者であった。彼らの最初の活動は、インドにおけるデンマークの貿易拠点トランケバルへの布教を進めることであった。また、フィンマークのサーミたちへの布教についても支援を行なった。

その伝道省の活動で特筆すべきものが、グリーンランド伝道である。ノルウェー生まれのハンス・イーエゼ Hans Egede(1686-1758)が最初にその伝道をおこなった。イーエゼは 1704 年にノルウェーからコペンハーゲンに出てきた。当時は敬虔主義が流行ろうとしていた時代であったが、彼自身は正当派で敬虔主義者にはならなかった。22 歳の時（1708 年）にノルウェーの片田舎の牧師となって以来、伝道省にグリーンランドでの布教を何度も願い出た。もちろん国王にも請願した。その結果、1721 年にグリーンランドへの伝道を命じられ、妻と 4 人の子どもと共に「希望号 Haabet」と呼ばれた船でベルゲンを出航した。他には 44 人が同乗、そのうち 30 人は兵士であった。国王からはグリーンランドの伝道を任せられ、年収 300 リースダーラを得ることになった。国王はまたグリーンランド伝道を貿易と合わせても考えていた。さらに今回は伝道以外にもう一つの目的があった。それは中世にはアイスランドからの移住者がいたが、その子孫がグリーンランドで生存しているのかを確認することであった。生きていれば彼らは未だカトリック教徒であり、その彼らにプロテスタントの教えを広めることも今回の伝道目的の一つであった。

グリーンランドに到着以来、イーエゼは苦労の連続であった。言語が通じない異民族にキリスト教を伝道するのは至難の業であった。イヌイットの言葉を覚えた子ども達の援助もあり、彼らはゴッドホープ（現在のヌーク）に植民地を形成し、結局 15 年間滞在した。期待された北欧系の子孫は残念ながら既に死滅していた。1731 年にはクリスチャン 6 世が植民地化の停止を命じたが、イーエゼは家族とともに自発的に居残り植民地化を継続した。1735 年には妻が亡くなり、翌年イーエゼは帰国した。コペンハーゲンに戻ってグリーンランド・セミナリウムを設立してグリーンランドで布教する者達の教育にあたった。1740-47 年にはグリーンランドの監督（司教）を務めた³⁵。長男のポールは牧師となりグリーンランドで宣教師となったり、新約聖書を現地語に翻訳したり、グリーンランドにおけるキリスト教の発展に寄与している。

イーエゼのグリーンランド伝道は、それが今日のグリーンランドがデンマーク王国の一部であることに繋がっているが、フレデリック 4 世時代だけを考えると布教も貿易も成功したとはいえない。また、植民者及びヨーロッパから来航する船舶関係者によって天然痘が持ち込まれ、免疫がないイヌイットの死亡率は高く、現地社会に大きな影響も及ぼしたのであった。

晩年の国王と宗教

国王と敬虔主義の関わりについて述べておきたい。晩年のフレデリック 4 世は歳を取るごとに憂いが深くなった。まず、王妃アンナ・ソフィエとの関連では、二人の間には正式に判明しているだけでも 6 人の子どもが誕生した。その内の 3 人はアンナ・ソフィエが正妻となった後に誕生して、王子・王女の称号を得ている。しかしその 6 人全員が乳幼児の間に亡くなっている。国王はこれがキリスト教で禁じられている重婚の罪を自らが犯したことに対する神からの「天罰」だと思い、その許しを請うためにさらに、宗教的になった。そして、次節で述べるコ

ペンハーゲン大火（1728年）であるが、3日間猛威をふるった結果首都の40パーセントが焼失し、重要な建築物や図書も焼け落ちるなど、甚大な被害を被った。コペンハーゲン市民はこれを「天の怒り」と考え、もちろんフレデリック4世もそう思った。また国王は1729年11月には訪問中の大砲鋳造所で爆発事故に巻き込まれるという不幸にも見舞われた。重苦しい心持のなかで国王は世間の喧噪から逃れ、フレデンスボー城において静かで敬虔な生活に入り、長男に譲位することも考えていた。しかし、それは叶わなかった。さらに健康の衰えと共に国王の最大の心配は愛する王妃、略奪・重婚までしたアンナ・ソフィエの行く末であった。彼女に対する嫌悪を公的にも表明していた王太子クリスチャン（後の国王クリスチャン6世）のもとで、自分の死後どのような待遇を受けるのかが一番の心配事であった。そのようなこともあり、フレデリック4世はますます宗教にのめり込むのであった。そして、国王が亡くなる半年前に出されたのが以下にみる安息日勅令であった。

1730年4月21日の安息日勅令 Sabbatordning

上述のような背景で公布された安息日に関する勅令の要点を以下に記す。

- ①礼拝の時間に教会外にすることが禁止され、見つければ警察当局に引き渡され処罰される。
日曜・祭日には、夕べの歌 *aftensang* が終わるまで労働や商売をしてはいけない。例外は薬局やパン屋、収穫期の農民である。違反者には罰則が課される（第2条）。
- ②飲食を供する場所の営業時間が定められ、違反する場合は処罰される（第3条）。
- ③日曜・祭日において市門を出ての散歩や外出は、原則的に禁止される（第4条）。
- ④礼拝中の私語や歩き回ることが禁止される。キリスト教徒として相応しい態度をとらねばならない（第5条）。
- ⑤結婚披露宴のような宴会は都市においては禁止され、平日での実施が推奨される。農村においては平日は労働日であるため、日曜・祝日における開催が認められている（第6条）。
- ⑥説教の後、教会ではカテキスムスが教えられ、必要に応じて口頭試問も行なわれる（第7条）。
- ⑦日曜・祭日およびその前夜に、演劇、宴会、パーティ、仮面舞踏会等の開催が禁止される。
違反する場合は警察等が事情を聴取し、罰則が課される（第8条）。
- ⑧軍隊における士官は人々の模範となるよう熱心に教会に通うことが求められる（第9条）。
- ⑨本勅令に関する罰金は貧民や最も援助が必要な者のために使用される（第10条）。

第1条、第2条は条文が長く、様々な場合が示され、さらに詳細な処罰が具体的に挙げられている。特に処罰は、最初は罰金であるが、支払うことが不可能であれば、教会の敷地にあるさらし台（身体を拘束される場合もある）に、初回は1時間、2回目は2時間さらされる、という具合であった。このフレデリック4世の安息日勅令は、しかるべき理由が無い限り、日曜日の教会礼拝を怠る者に厳しい罰を与え、休日あらゆる形の世俗的な活動を禁止している。そして罰則（罰金+体罰）を明示することによって拘束力を持たせている³⁶。本勅令より明確に浮かび上がるのは宗教にすがらざるを得ない国王フレデリック4世の心の内である。またこ

の勅令は、王室の敬虔主義への傾倒を示し、次のクリスチャン6世時代に大きな影響を与える重苦しい時代の兆しをも現している³⁷。

4-2-5 コペンハーゲン大火

歴史をふりかえると首都コペンハーゲンはこれまで度々の大規模火災に見舞われてきた。例えば1728年、1795年、1807年³⁸の大火がよく知られている。なかでも1728年の大火は首都の5分の2が灰燼に帰したという歴史上最大規模のものである。規模の割には死傷者の数こそは比較的少なかったが、文化財を始め焼失した文化遺産の損失は莫大であった³⁹。

具体的に大火の様子を見ると、10月20日（水）夕方6-8時の間に、西門付近の住居部分から出火し、一帯に広がった後、当日の強風に煽られて、火の手は中世風な建築物の多い中心部Indre byに広がった。消防団は1日の仕事を終えた後で大半が酩酊状態で用をなさなかった⁴⁰。そして消防ワゴンも狭いコペンハーゲン市内の道を通ったり、曲がることも難しかった。人々が安全だと思って避難した教会も焼失した。例えば聖母教会が燃え、隣接したコペンハーゲン大学や教授住宅にも延焼した。大学図書館所蔵で焼滅した図書の中にはアリストテレスによる著作の印刷本のような貴重なものがあった⁴¹。さらに天文学的に貴重なチュコ・ブラーエの天球儀（1570年に完成。木製で直径150センチ、1000個以上の星が記されている）やオーレ・レマーの実験器具も焼失した。

2日後の金曜日になって風向きも北向きになり、要塞警備兵8000人、水兵4000人が組織的に動けるようになったため火が収まり始め、ようやく土曜日には完全鎮火となった。

この後の問題は復興であった。再建委員会が設置され広さ12-15mのメインストリート、10mのサイドストリートが提案され、全ての新築住居はハーフティンバード（木骨造り）ではなくレンガ造りにすべきだという方針も示された。さらにコペンハーゲン火災保険(1731)も設立された。国内では職人が足りずドイツからも多くの職人が渡来し、1737年頃にはほぼ復興を見た。近代的な絶対王が君臨する首都に変化したのである。

この大火に際して国王はどのような対応をしたのだろうか。当日は水曜日で謁見の日であった。長い1日を終えて、火事の報を受けた国王夫妻は要塞から火事の様子を窺い、夜中の1時頃城に戻った⁴²。翌日、フレデリック4世は馬に乗って状況を視察したが、城に火が近づいてきたため国王夫妻は避難のためにフレデリクスボー城へ赴いた。息子のクリスチャンは住居前の消火活動を手伝っている。なお、国王広場では避難民に国王からのパンとビールが配給された。

前節で述べたように次々と子どもを亡くし、それを神の仕打ちと恐れ、ますます敬虔主義に傾倒するなか、お膝元で臣民にまで大きな被害を生んだ大火に対しては神の御業として、さらに怖れを強くしたことだろう⁴³。

ホルベアは追悼演説でこの大火と国王について次のように述べている。「国王は運命と闘った・・・(中略)・・・あたかもこの不幸が、国王をして国父としての義務感そして揺るぎなきをこの時代に示させたのである」。

4-2-6 その他の社会政策

ユグノーの到来

デンマークは絶対王制導入後、重商主義政策のもと商工業の発展のために政策的にユダヤ人など外国からの移民を積極的に誘致・受け入れてきた。フレデリック 4 世の父、クリスチャン 5 世の時代、1682 年にはユトランド半島中部東岸の都市フレデリシアにユダヤ人を受け入れた⁴⁴。そして 1684 年にはコペンハーゲンにユダヤ人コミュニティが形成されている。同年彼らは国王から自宅で宗教行事を執り行うことも認められている。

このような流れのなかでフランスからユグノーもデンマークに到来している。1680 年代のフランスでは改革派教会に属するユグノーは、カトリックの政権から大きな圧力を受け、ヨーロッパの他のプロテスタント諸国、特にデンマークとドイツに亡命した。ユグノーはもともと賢明な商人・手工業者という評判があり、クリスチャン 5 世の妃シャーロッテ・アマリエ自身改革派教会に属していることも相まって、1681 年に最初のユグノーがデンマークに入国することが許可された。1685 年にはさらに多くの者が首都コペンハーゲンに到来し、1689 年には彼らの教会が竣工している。次王フレデリック 4 世はユグノー達が高德で仕事熱心であるというよい評判を聞き、1719 年にはブランデンブルクのユグノー一家をフレデリシアに招き、数々の特権も与えられた⁴⁵。1720 年代以来フレデリシアにユグノーのコロニーが形成され、その中には約 70 家族が含まれた。町は彼らの導入によって商業・経済発展を一層進めたいと考えたのである。1736 年にはユグノーのための教会と墓地も設置されている⁴⁶。

ユグノーたちは付与された土地でたばこを栽培し、フレデリシアのタバコ産業興隆に尽力した。また彼らはジャガイモを持ち込み、デンマーク人の食生活に根付かせるという貢献もしている。今日でもコペンハーゲンとフレデリシアにはユグノーの宗教コミュニティが存続し、その教会はデンマークの自由教会に属している。

王立孤児院 Vajsenhus

デンマークで敬虔主義が次第に広まる中、1727 年 10 月 11 日に国王フレデリック 4 世の命によって（1727 年 7 月 21 日、9 月 29 日）、首都コペンハーゲンに捨て子のための孤児院が設立された。16 世紀後半に設置が広がったドイツのものを手本にしている。建物自体は騎士用の教育施設であったものを用い、場所は当時ニュー・ギャーザ Nygade と呼ばれ、現在の地方裁判所があるところに位置した。そこにはマニュファクチャー、薬局、印刷所、書店が併設されていた。1727 年 7 月 21 日付けの国王フレデリック 4 世による設立指示文書 fundats からその具体的な内容を見てみると次の通りである⁴⁷。

- ① 設立資金として 60,000 リースダーラを投入し、以後は「世界が続く限り」年 2000 リースダーラを付与する（第 1 条）。
- ② 定員は男女合わせて 100 名で、衣食住を提供し、キリスト教の教え及び知識を与え、入所者は階層や出自に関係なく扱われる（第 3 条）。

- ③入所できるのは5-6歳以上で、特段のことが無ければ自立できる16-17歳まで居ることができる（第5条）。
- ④入所できないのは、精神疾患のある者や伝染病に罹患しているおそれのある者である（第6条）。
- ⑤この施設において子ども達がデンマーク王国生まれであれば、出自は関係しない（第7条）。

文書ではまず経済的基盤が明記され、定員や入所者の年齢そして入所を拒む条件が記されている。さらにデンマーク生まれであれば出自に関わらず平等に扱われることが明示されている。興味深いのは、文中に頻繁に登場する「世界の終わりまで indtil verdens Ende」という表現である。この施設を永続させたいとする国王の固い意思が読み取れる。

1720年代終わりから1730年代初めにかけて、当時を代表する詩人ヨハネス・エーヴァル Johannes Ewald の父であるイーネヴォル・エーヴァル Enevold Ewald が牧師を務めた。彼は敬虔主義に強い影響を受けた人物で、当時この孤児院が首都における敬虔主義の中心地かつ祈りの場ともなった。開設当初、経済的基盤を強固にするため聖書および賛美歌集出版の特権⁴⁸が与えられ、そこからの収入も維持費にまわされた。設立直後に先述のコペンハーゲン大火に遭い、残念ながら全焼してしまう。1765年によく再興され、現在も児童自立支援学校として存在している⁴⁹。

この王立孤児院の設置には二つの大きな背景がある。一つは敬虔主義の広まり、すなわち親を亡くした子ども達を援助するという目的をもった慈善的行為である。もう一つは1721年以降の学校設置の流れとの関連である。さらに絶対王制下の社会において、国王が親の無い子ども達の、保護者すなわち国父であろうとする姿勢も看取できる。

5. おわりに

コペンハーゲンの大火の後、フレデリック4世は頻繁に馬に乗って首都の復興の様子を見て回った。その後、1729年11月には大砲製造所での爆発事故のため重傷を負い、約1ヶ月寝たきりとなった。同時期に2歳のカール Carl 王子が死去している。カールは王妃アンナ・ソフィエとの間に誕生した6人目（最後）の子で、これでカールも含めて全員乳幼児の間に死去したことになる。このことは重婚に対する神の裁きだとフレデリック4世は受け取ったに違いない。そして年が明けた1730年の初め、彼はフレーデンスボー城に移り住んだ。王位を息子に譲って自分は残りの人生を魂の救済に捧げたいと強く思ったのである。その冬は厳しく、約6週間フレーデンスボー城に滞在しただけで、結局コペンハーゲンに戻ってきた。その後、先述した日曜・祭日に教会に通うことを義務づけ、罰則規定が厳しい安息日勅令を公布したのである。これは神の裁きに対する彼なりの対応だったのであろう。そして1730年、国王はもともと浮腫を患っていたが、侍医の忠告にも従わず王国南部への旅を強行した。ゴットブで病状が急速に悪化し、医者のお勧めで首都に戻る途中、59歳の誕生日を迎えた直後の1730年10月12日、フン島のオーデンセで亡くなった。その亡骸は首都に戻った後ロスキレ大聖堂に安置

された。

さて、国王が生前最も気にかけていたアンナ・ソフィエの処遇であるが、フレデリック 4 世の意向に背き、彼女はコペンハーゲンからは遠ざけられ、ユトランド半島にあるクラウスホルム Clausholm で余生を送ることになった。ただ王妃の称号を維持することが認められ、一時金を含む生涯年金も受領している⁵⁰。

次にフレデリック 4 世時代の社会政策について考えたい。前号でもみたようにフレデリック 4 世は、王位継承後すぐにスウェーデンとの戦争を経験した結果、1701 年には民兵徴集制を導入して将来の戦争に備えた。また彼は当初、宗教的な影響はさほど受けなかったが、ペストの広がりを経験するなど、年を経るにつれて次第に敬虔主義への傾斜を強めるようになった。その流れのなかで、1708 年には救貧法を制定して絶対主義国家が貧民の救済にあたることを明確にした。さらに敬虔主義はキリスト教教育を進める学校設置に向い、1721 年にはいわゆる騎士学校が設置され、1727 年には王立孤児院の設置をみた。どちらも教育史上意義深い出来事である。また、フレデリック 4 世はホルベアが賞賛した国王謁見制を法制化し、絶対王制下における制度として根付かせた。この国王謁見制は国王と国民の距離を縮め、絶対王の支持基盤を固めるのに大いに寄与している。そして亡くなる半年前には上にみた様々な憂いにより、安息日に教会へ通うことを義務化する勅令を公布している。これはフレデリック 4 世の社会政策の最後を締めくくる、まさに象徴的な政策となっている。

大北方戦争の結果、失地回復には至らなかったが、宿敵スウェーデンは領土を喪失したうえに威信も低下した。大国から小国へ転落したのである。スウェーデンはもはやライバルではなくなった。さらには強大化するロシアを前にして、小国同士が協力する仲となった。東側の外憂が消滅したのである。また 100 年余りに渡ったゴットロープ家問題が解決し、南側の外憂も収まった。さらには、スウェーデンとの講和条約により海峡通行税も入るようになった。これらによりデンマークは商業繁栄時代を迎える準備が整うのである。そして、絶対王制を旧貴族から守るために記された政治的遺訓が、フレデリック 4 世のものが最後になっていることは、絶対王制が安定した新しい段階に入ったことを意味している。それまでの国王主導の絶対主義から、いわゆる官僚絶対主義の時代を迎えることになるのである。

最後にフレデリック 4 世のことを記して本稿を終えたい。彼の自伝を書いたヴィット Hvidt はフレデリック 4 世のことを自著の書名で次のように記している、「ふしだらで真面目な人 En letsindig alvorsmand」。日本語よりもデンマーク語がその複雑な人間性を的確に表している。

註

1 デンマークを代表する喜劇作家で北欧のモリエールとも評される。代表作には『山のイエッペ』『エラスムス・モンターヌス』『ニルス・クリムの地底旅行』等がある。コペンハーゲン大学教授でもあり『デンマーク・ノルウェー史』等歴史の著作も多い。国王とも密接な関係を持っていた。ホルベアは基本的には保守的な人物であり、絶対王制の擁護者でもあった。

2 追悼演説は次のものを利用した（以後、「ホルベア追悼演説」と表記）。HANS MAJESTÆT KONG FREDERIK DEN FJERDE i sin tid KONGE TIL DANMARK og NORGE de VENDERS og GOTHERS

osv. holdt i konsistorium den 12. december aar 1730

Af LUDVIG HOLBERG, KØBENHAVN, DET BERLINGSKE TRYKKERI, 1730.

([http://holbergsskrifter.dk/holberg-](http://holbergsskrifter.dk/holberg-public/view?docId=OratFrIV%2FOratFrIV_overs.page;toc.depth=1;brand=&chunk.id=start)

[public/view?docId=OratFrIV%2FOratFrIV_overs.page;toc.depth=1;brand=&chunk.id=start](http://holbergsskrifter.dk/holberg-public/view?docId=OratFrIV%2FOratFrIV_overs.page;toc.depth=1;brand=&chunk.id=start))

³ 'Frederik IV', "Dansk Biografisk Leksikons 3. udgave" udkom i 16 bind i perioden 1979-84 med Svend Cedergreen Bech som redaktør. https://biografiskeleksikon.lex.dk/Frederik_4. またデンマークはザクセンやロシアと共にスウェーデンの「埋葬」に参加するのだとしていた。Jesperesn, Knud J.V.: Gyldendals Danmarks historie Bd.3, (red., Søren Mørch), K, 1989. s. 306.

⁴ 1715年には、英国＝ハノーヴァー国王ジョージ1世に3万リースダーラで売却し、さらに見返りとしてスレースヴィにおけるゴットープ家領がデンマーク領であることの保障を得ることになった。

⁵ Jesperesn, op. cit., s. 310.

⁶ カール12世はすんでのところで脱出することに成功し、スウェーデン南部に上陸した。

⁷ バルト海に進出するロシアの対抗勢力を作りたいとする英国の強い意向があり、その為にスウェーデンを弱体化させるわけにはいかず、デンマークの失地回復が認められなかった。Scocozza, Benito:

Danmarkshistoriens hvem, hvad og hvornår, K. 1996., s.162.

⁸ 城には以下の文言が記されている

「戦争の時が神の恩寵により終焉を見たとき

フレデンスボー城はフレデリック4世によって建築され

そしてその平和のテントが戦争の記念となる

ゆえに城はフレズ（平和）と言う名とフレデリックという

両方の名を得るのである

Da Kriig og Orlogs-Tiid ved Gud en Ende fik,

Blev Fredensborg opbyggt af Fjerde Friderich,

Og at det Freds-Paulun skal Krigens Minde være,

Saa fik det Navn af Fred og Friderich at bære」

⁹ 講和締結後、フレデリック4世は父王の政治的遺訓を読んで、父親が自分に課した課題の大半が片付いたとしている。Jespersen, Knud J.V.: Danmarks Krigshistorie (1600-1720), red. Ole L. Frantzen og Knud J. V. Jespersen, K. 2010. s.369.

¹⁰ 大北方戦争終結後、ロシアのピョートル1世によるバルト海へのさらなる進出が懸念されるなか、ホルシュタインのゴットープ家はロシアと関係を強化していたため、警戒していた。1725年にピョートル1世死去の報がデンマークに届くと歓声があがったという。Petersen, Kai: Danmarkshistoriens hvonår skete det, K. 1985. s.187.

¹¹ 正式な婚姻という形式をとらずに、慣例的な愛人という立場におくことも出来た。しかし、フレデリック4世はその方法をとらずわざわざ重婚とし、そのことで王位継承者のクリスチャンとの関係が悪化してしまう。なぜ、婚姻ということにこだわったのか、その真意は不明のままである。

¹² その配偶者が Christine Sofie Holsten で、知的で気が利き、王室の中心でもあった。国王にも気に入られていた。Cedergreen Bech, S: Oplysning og tolerance 1721-1784, Politikens Danmarkshistorie, Bd. 9, K. 1985., s. 43.

¹³ Ibid.

¹⁴ 短い前言および31ヶ条。国王法の条項に関連しておりいくつかの外交的なことも含めて、絶対王制下の内政に関する基本的なことが述べられている。

¹⁵ 15年後にクリスチャン5世自らの手で補足的なことが加えられている。

¹⁶ 現在、王立古文書館 Rigsarkivet 所蔵。全13頁。前言と20ヶ条より構成。最後の第20条は国王の直筆で、署名とシールも押印されている。

¹⁷ 旧貴族とは絶対王制成立以前の旧制度において貴族であった者を指す。なお1671年には絶対王制下における新しい貴族制度が導入されている。

¹⁸ Jesperesn, Gyldendals Danmarkshistorie Bd. 3, s. 317.

¹⁹ オルデン＝ヨーアンセン Sebastian Olden-Jørgensen はフレデリック4世が戦争中、実際に旧貴族出身の軍人と接触する機会があったため、軍事クーデターを恐れていたとしている。Olden-Jørgensen, Sebastian: Christian Vs og Frederik IVs politiske testamenter, Historiske Tidsskrift, 96-2, 1996.

第9号（2023年3月）

s.334.

²⁰ ノルウェーの元知事で、グリーンランド、アイスランド、フェロー諸島をロシア皇帝の手に渡そうとしていたとの嫌疑で逮捕、処刑された。Petersen, op. cit., s.187.

²¹ 敬虔主義については、後の 4-2-3 宗教政策 を参照。

²² 全国の王領を 12 の騎士領に分けた。

²³ Larsen, Joachim: Bidrag til Den danske skoles historie, Bind 1, K. 1984, s. 197.

²⁴ この動きについては次のものを参照。Ibid., ss. 197-209.

²⁵ 学校の校長向けと学校を所管する教区牧師に対する指示書 Instruction もある。

²⁶ 学校の見取り図を見ると、教師の住居部分（寝室、台所、食堂、居間）、馬屋が示されている。Cf. Feldbæk, Ole: Gyldendals og Politikens Danmarkshistorie, red. Olaf Olsen, Bind IX, K. 1990, s.186.

²⁷ Johansen, Hans Chr.: En samfundsorganisation i opbrud, Dansk socialhistorie Bd.4., K. 1979, s.248.

²⁸ 注 2 のホルベア追悼演説参照。

²⁹ これまで例えば、大晦日の夜には望む者は誰でも王宮に入れ、国王が食卓に座っている食堂にまで入れた。また、国王主催の仮面舞踏会も同様で、過度でない仮面と舞踏会用の衣服を着用する者は誰でも参加することが出来た。Holm, Edvard: Danmark-Norges Historie fra den Store Nordiske Krigs Slutning til Rigernes Adskillelse 1720-1814, Bind I, K. 1891, ss. 248-49.

³⁰ Hvidt, Marie: Frederik IV –En letsindig alvorsmand-, K. 2004, s. 270.

³¹ ホルムもこの制度が「国民の心を捉えた」と評している。Holm, op.cit., s. 250.

³² 19 世紀にはあのデンマークを代表する童話作家アンデルセンもこの制度を利用して国王に謁見し、結果的にイタリア留学のための経済的援助を受けている。現在では月に数回月曜日の午前中に謁見の時間が設けられ、国王任命の高級官僚の退職の挨拶、勲章授与に対する御礼、町や施設に女王が訪問したことに対する返礼、などが基本である。謁見を希望する場合は決められた時間にクリスチヤンボー城の所定の場所に集合した上で、氏名と謁見を希望する理由を示した上で謁見の間において 1 対 1 で会って話が出来るのである。これは絶対王制時代から制限はあるものの国民が予約無しに国王に直接会えるという制度が続いているのである。近隣の君主制を採用しているスウェーデンやノルウェーでも見られないデンマーク独自の制度である。クリスチャン 8 世の日記にもこの国王謁見制のことが頻りに登場する。Cf.

(Ved)Møller, Anders Monrad: Kong Christian VIII.s dagbøger og optegnelser, IV 2. del (1844-1848), udgiver af Det kongelige danske selskab for fædrelands historie, K. 1995.

³³ 1722 年にモラヴィアからドイツに逃れてきたフス派、兄弟団の一団が、ヘルンフート（主の守り）と呼ばれる共同体をツィンツェンドルフ伯爵の領地に形成した。その共同体をモラヴィア兄弟団と呼ぶ。彼らは布教のために当時のデンマーク領西インドのセント・トーマスやグリーンランドにも伝道者を派遣した。

³⁴ Feldbæk, op. cit, s.184.

³⁵ 後に「グリーンランドの使徒」と呼ばれる。

³⁶ 実際は取り締まる警察組織の方も人員が手一杯であった。Holm, op.cit., s. 573.

³⁷ この法律は次の王クリスチャン 6 世が即位後早い時期（1731 年 1 月 19 日の勅令）で廃止している。その理由はデンマーク法（1683 年）の祭日に関する規定が大変素晴らしいからだという。しかし、4 年後の 1735 年に「一部の住民が仕事や不必要な用事やその他世俗的な遊びのために日曜日と祝日に教会に行くことを怠った」という理由で、自ら廃止した父親が公布した 1730 年の安息日勅令とほぼ同内容の法律を再導入している。ただ相違点は 1735 年の勅令の方が罰則がより緩やかであることである。

³⁸ イギリスの砲撃による火災。市の南西部分が甚大な被害を受ける。死者約 1600 名を数え、さらに家屋約 300 軒が焼失している。

³⁹ Lomholt-Thomsen, Johs: Kilder til Danmarks historie efter 1660, Bind I, Historielæreforeningen, Gyldendal, K. 1973, ss. 40-44.

⁴⁰ 消防団は 1 日の仕事を終えた後で大半が酔っていた。警察署長も様子を見に行ったら後自宅で飲酒した。Salmonsens konversationsleksikon, Anden Udgave, Bind VIII, K, 1915-1930, s. 831.

⁴¹ アイスランド中世の手書き史料は焼失を免れた。マグヌソン Arni Magnusson 教授が文書を持ち出すことに成功し、そのおかげで現存するのである。

⁴² Cedergreen Bech, Politikens Danmarkshistorie, Bd. 9, s. 157.

⁴³ 多くの者が今回の大火を「神の罰」だと感じた。Ibid., s.163.

⁴⁴ 街自体は 1650 年に首都を代替する軍事拠点として設置されたが、交通の要所で平坦な土地を商業的にも発展させようとユダヤ人を受け入れた。

⁴⁵ Cf. Østergaard, Rasmus Thestrup: Enevældens tid, Århus, 2018, s.97.

⁴⁶ 1787 年には全人口 3,066 人のうち 317 人がユグノーであった。Ibid., s.92. フレデリシアではユグノ

一らは活動的で賢明な市民としても知られ、町の経済的發展に大きく寄与したのであった。

⁴⁷ 指示書については次のものを参照した。<https://vajsenuset.dk/om-os/skolen-vedtaegter/>

⁴⁸ 現在も『デンマーク賛美歌集 *Den Danske Salmebog*』を出版・販売する特権を有している。

⁴⁹ 形式的には私立の国民学校 *folkeskole* であり、元首相のアンカー・ヨーアンセン *Anker Jørgensen*(1922-2016) も生徒であった。国家からの補助金も投入され、国王が後援者 *protektor* を務めている。

⁵⁰ 死後、亡骸はロスキレ大聖堂内のフレデリック4世と同じ屋根の下ではあるが、真横ではなく、対角線上の独立した礼拝堂に安置された。

主要参考文献（発行地が København の場合は K. と略）

Andersen, Dan : *Store Nordiske Krig I-II*, K. 2021.

Askgaard, Finn og Arne Stade (red.): *Kampen om Skåne*, K. 1983.

Bjerg, Hans Chr. : *Danmarks stilling i Østersøen 1700-1900*, K. 1977.

Bjerg, Hans Chr. Og Ole L. Frantzen: *Danmark i Krig, Politikens Forlag*, K. 2005.

Brengsbo, Michael: *Til venstre hånd -Danske kongers elskerinder*, Gyldendal, K. 2010.

Brengsbo, Michael: *Frederik 4. som krigsleder i danske imperium*, i Arestad, Knud (red.): *Perspektiver på Den store nordiske krig 1700-1721. 300 år etter Carl XIIIs fall*, Oslo, 2018.

Cedergreen Bech, S: *Frederik IV*, i *Dansk biografisk Leksikon IV*, K. 1980.

Cedergreen Bech, S: *Oplysning og tolerance 1721-1784*, *Politikens Danmarkshistorie*, Bd. 9, K. 1985.

Christensen, Svend Aage og Henning Gottlieb (red.): *Danmark og Rusland i 500 år, Det sikkerheds- og nedrustningspolitiske udvalg*, K. 1993.

Christensen, Villads: *Daglige begivenheder i København 1711-22, Indberetninger fra Politimester Ernst til Kongen. Historiske meddelelser om København Bd. 7., 1919-20.*

Dehn-Nielsen, Henning: *Frederik 4. -Tordenskiolds konge*, Forlaget Sesam, K. 2001.

Engelstoft, Poul og Svend Dahl: *Frederik IV*, i *Dansk Biografisk Leksikon*, IV, K. 1933.

Erslev, Kristian: *Frederik IV og Slesvig*, K. 1901.

Fabricius, Knud: *Frederik IV*, K. 1944.

Feldbæk, Ole: *Gyldendals og Politikens Danmarkshistorie*, red. Olaf Olsen, Bind IX, K. 1990.

Feldbæk, Ole: *Dansk Udenrigspolitik Historie Bind 2*, Gyldendal Leksikon, K. 2006.

Garde, H. G. : *De danske-norske Sømagts Historie 1700-1814*, K. 1852.

Hjelholt, Holger: *Inkorporationen af den gottorske del af hertugdømmet Slesvig i året 1721*, K. 1937-38.

Holberg, Ludvig: *Danmarks og Norges beskrivelse*, K.1729.

Holberg, Ludvig: *HANS MAJESTÆT KONG FREDERIK DEN FJERDE i sin tid KONGE TIL DANMARK og NORGE de VENDERS og GOTHERS osv. holdt i konsistorium den 12. december aar 1730, KØBENHAVN, DET BERLINGSKE TRYKKERI, 1730.*

(<http://holbergsskrifter.dk/holberg->

-
- public/view?docId=OratFrIV%2FOratFrIV_overs.page;toc.depth=1;brand=&chunk.id=start)
- Holm, Edvard: Danmark-Norges indre Historie under Enevælden fra 1660 til 1720 I-II, K. 1885-86.
- Holm, Edvard: Danmark-Norges Historie fra den Store Nordiske Krigs Slutning til Rigernes Adskillelse 1720-1814, Bind I, K. 1891.
- Holm, Edvard: Studier til den store nordiske Krigs Historie I-II, K. 1881-1912.
- Holmgaard, Jens: Uden at landet besværes -Studie over Frederik IV landmilit med særlig henblik på spørgsmålet om stavnsbånd og bønderkarlenes vilkår i øvrigt, K. 1999.
- Hvidt, Marie: Frederik IV -En letsindig alvorsmand-, K. 2004.
- Hvidtfeldt, Johan: Håndbog over danske lokalhistorikere, K. (Den Historisk Fællesforening), K. 1952-56.
- Jensen, Birgit Bjerre: Udnævnelsesretten i enevældens magtpolitiske system 1660-1730, K. 1987.
- Jesperesen, Knud J.V.: Gyldendals Danmarks historie Bd.3, (red., Søren Mørch), K. 1989.
- Jesperesen, Knud J.V.: 1648-1720, I Carsten Due-Nielsen, Ole Feldbæk og Nikolaj Petersen (red.): Danske udenrigspolitikens historie Bd.2, Revanche og neutralitet 1648-1814, K. 2002.
- Jespersen, Knud J.V.: Danmarks Krigshistorie (1600-1720), red. Ole L. Frantzen og Knud J. V. Jespersen, K. 2010.
- Johansen, Hans Chr.: En samfundsorganisation i opbrud, Dansk socialhistorie Bd.4., K. 1979.
- Jørgensen, Frank og Westrup, Morten: Dansk centraladministration i tiden indtil 1848, K. 1982.
- Jørgensen, Poul Johs.: Dansk Retshistorie, K. 1965.
- Larsen, Joachim: Bidrag til Den danske skoles historie, Bind 1, K. 1984.
- Lomholt-Thomsen, Johs:Kilder til Danmarks historie efter 1660, Bind I, Historielæreforeningen, Gyldendal, K. 1973.
- Olden-Jørgensen, Sebastian: Christian Vs og Frederik IVs politiske testamenter, Historiske Tidsskrift, 96-2, 1996.
- Olsen, Gunnar (Afsluttet af Finn Askgard): Den unge enevælde 1660-1721, Politikens Danmarkshistorie, Bd. 8, K. 1985.
- Petersen, E. Ladewig: Fra standssamfund til rangssamfund 1500-1700, Dansk socialhistorie III, K. 1980.
- Petersen, Kai: Danmarkshistoriens hvornår skete det, K. 1985.
- Rockstroh, K.C.: Udviklingen af den nationale Hær i Danmark II-III, K. 1916-26.
- Schmidt, J.Boisen: Studier over statshusholdningen i kong Frederik IVs regeringstid, K. 1967.
- Schou, J.H. m.fl. : Schous Forordninger I-XXII, K. 1777-1840.
- Scocozza, Benito: Danmarkshistoriens hvem, hvad og hvornår, K. 1996.
- Skipper, Jon Bloch(red.): Danmarkshistoriens Årstal, Achehoug og Det Historiske Hus, K. 2001.
- Skrubbeltrang, Fridlev: Det danske Landbosamfund 1500-1800, K. 1978.
- Tuxen, A.: Kong Frederik IVs personlige Indsats som Krigsherre i den store nordiske Krig, i Festskrift til Kr. Erslev, K. 1927.

Worsaae, J. J. A. (udg.): Kong Christian Vs Testamenter som Tillæg til Kongeloven. K. 1860.

Østergaard, Rasmus Thestrup: Enevældens tid, systime, Århus, 2018.